

財団法人 損保ジャパン美術財団

平成22年度(2010年度)事業計画

(平成22年4月1日～平成23年3月31日)

I 方針

1. 展示活動を活発に行い、多くの人々に親しまれる美術館として美術・文化の振興につとめる。
 - (1) 特別展においては当美術館としての特性を生かし、国内外美術館等から優れた美術品を招致する。
 - (2) 館外展を含め館蔵作品の貸し出しを通じて、国内外地域との文化交流を図る。
2. 優れた美術家の表彰ならびに支援によって美術界の発展に寄与する。
3. 社会教育、特に青少年を対象とした教育・普及活動を推進する。
特に対話による美術鑑賞教育支援の仕組みを構築する。
4. 新公益法人への移行および定款事業改定を踏まえて、今日的な視点で財団の既存事業の内容や業務運営を見直す。

II 事業

1. 美術作品の収集、保存、公開

(1) 展覧会の企画開催

① 特別展 (各展の企画趣旨を別紙にて説明)

- 1) モーリス・ユトリロ展 (平成22年4月17日～7月4日)
- 2) トリック・アートの世界展 (平成22年7月10日～8月29日)
- 3) ウフィツィ美術館自画像展 (平成22年9月11日～11月14日)

② 企画展

- 1) 損保ジャパン東郷青児美術館大賞受賞記念「櫃田伸也展」
(平成23年1月8日～2月13日)
- 2) 第30回損保ジャパン美術財団「選抜奨励展」(平成23年2月26日～4月3日)
- 3) 「所蔵作品展」 (平成22年11月20日～12月26日)

③ 併設展示

1) 常設展示コーナー

ゴッホ《ひまわり》、セザンヌ《りんごとナプキン》、ゴーギャン《アリスカンの並木路、アルル》を常設展示する。

2) 所蔵作品展示コーナー

各展覧会とも開催期間中、所蔵作品展示コーナーを併設し、東郷青児作品ならびにグランマ・モーゼス作品他を展示する。

(2) 館蔵品・資料・文献の充実

1) 館蔵品の修復・点検

館蔵品の保存状態を的確に把握するため定期的に点検および記録写真の撮影を行い、作品の劣化防止に適切な手段を講じるほか、必要に応じて作品の修復、額縁の修理・取り替えを行う。

2) 資料・文献の収集・整備

館蔵品および展示作品に直接あるいは間接的に関連した資料・文献を収集し、学芸研究および展示活動の充実を図る。

3) パソコンの有効活用による資料・文献の収集・整備

パソコンの有効活用を図り、資料・文献の収集・整備、インターネットの活用による他館情報などの入手を積極的に行う。

(3) 調査・研究

1) 学芸職員の研修

学芸職員の資料研究あるいは保存・展示技術の研修を進める。

また、学会や各種機関の研修会・講座などに参加するほか、特色ある美術館や展覧会の見学などを通じ、学芸員の能力向上を図る。

2) 各種図録・解説書の刊行・頒布および説明会の開催

各種展示の理解を助けるため、図録、解説書を作成するほか説明会などを随時開催し、展覧会の充実に役立てる。特に、青少年を対象とした解説書の作成、説明会の実施などを積極的に推進する。

2. 展覧施設の運営管理

(1) 公共への協力

1) 施設・資料の公共への協力

公共体、教育機関あるいは美術研究者等からの美術に関する調査・研究・実習による施設および資料共用の要請に対し、可能な限り協力する。

(2) 他美術館との連絡・協調

1) 博物館会議、美術館会議などに参加して情報の交換を行うほか、随時見学等を行い、他美術館との連絡・協調を密にする。

(3) 広報活動

1) マスメディア

新聞、雑誌、テレビ等マスコミの取材に積極的に対応するほか、インターネットの積極的活用を含め広告媒体についても多様化を進め、展覧会および美術館の広報を行う。

2) ホームページ・携帯電話サイト(インターネットによる発信)

ホームページ・携帯電話サイトにおいて自館の展覧会情報とともに所蔵作品情報の情報提供を行っていく。

3. 美術家の支援、表彰

(1) 奨励賞の授与

損保ジャパン美術財団奨励賞を36団体の公募展に授与する。

(2) 選抜奨励展及び優秀作品の表彰

第30回展となる本展では、各団体の奨励賞受賞作家の作品と推薦委員から推薦された作家の作品を加えた展覧会を開催し、出品作品の中から優秀な作品を選考、表彰する。

(3) 大賞

昨年度の休止措置を継続し、上記(1)(2)も含めて今後のあり方について検討する。

4. 美術鑑賞の教育普及

(1) 新宿区立小中学校

前年度の「協働事業提案制度」の枠組みを終了し、新宿区未来創造財団との連携による新しい仕組みで、対話による美術鑑賞教育を実施する。

(2) 新しい展開

上記以外の美術鑑賞の教育普及活動のあり方を幅広く検討し、中長期計画を策定して、着手する。

5. 頒布品の制作・販売

ショップの拡充を図る。

6. その他

業務運営全般を見直し、新公益法人にふさわしい評議員会、理事会、業務執行理事、事務局の新しいあり方を構築する。

以上

平成 22 年度特別展の企画趣旨

1. モーリス・ユトリロ展

(平成22年4月17日～7月4日)

モーリス・ユトリロは、ルノワールら画家のモデルをつとめ、自らも画家として活躍したスザンヌ・ヴァラドンの私生児としてパリのモンマルトルに生まれた。才能と美貌に恵まれた母ヴァラドンは制作と恋愛に忙しく、息子の面倒はもっぱら彼の祖母にまかされていた。少年モーリスは寂しさをまぎらわすためか、次第にアルコールを口にするようになった。そんなユトリロが絵筆を取ったきっかけはアルコール依存症の治療だった。周囲に勧められて始めた制作活動だったが、主義や流派にとらわれず、自らの感性に基づいて描かれたユトリロの作品は、孤独な内面を反映したかのように独特の哀愁と詩情に満ち、多くの人々を魅了している。本展は絵画制作を始めて間もない「モンマニーの時代」、数々の傑作を生み出した「白の時代」、鮮やかな色彩が増して行く「色彩の時代」の作品を一堂に展示、全て日本初公開作品 90 点により、ユトリロの画業の変遷をたどる。

2. トリック・アートの世界展

(平成22年7月10日～8月29日)

高松市美術館の現代美術コレクションを中心に展開される本展覧会では、目の機能にもとづく錯覚や、固定観念に左右されやすい視覚の不確かさをあばくトリッキーな戦後美術を、4つの観点から外国作家を含む26名(予定)の作品で構成します。

<虚と実をめぐって>では、遠近法による不可思議な空間描写や「のぞきからくり」の立体作品 など、視覚の構造の曖昧さに疑問を投げかけた作品群を紹介。

<オプ・アートとライト・アート>では、1960年代に幾何学的パターンと色彩対比によって錯視効果を追求した抽象絵画オプ・アートや、電光の効果をみせるライト・アートを展示します。<スーパー・リアリズム>では、1970年代に写真を利用し克明に描写したスーパー・リアリズムなどかつてのトロンプ＝ルイユを思わせる作品をはじめ、リアリズムを武器に視覚に揺さぶりをかける作品を集めています。<古典絵画をめぐって>では、1990年代を中心に、名画のイメージに変装した自分を忍び込ませるなど、独自の視点で古典絵画を引用した作品を展示します。

古今東西、人の視覚の能力や構造に挑戦する美術は、美術界の傍流として確かに存在しています。それらは、ときにユーモアに溢れ、見る者の知性と遊び心をくすぐります。近年、伝統的なだまし絵・トリック・アートをテーマにした展覧会が開催されていますが、本展は時代を現代に絞り、日本作家を中心にした戦後美術をトリック・アートという切り口で紹介するユニークな展覧会です。

3. ウフィツィ美術館自画像展

(平成22年9月11日～11月14日)

ルネサンス黄金時代を育んだメディチ家の遺産を収蔵するウフィツィ美術館の「自画像コレクション」をご紹介します。ウフィツィ美術館は、中央集権国家の強大化によってフィレンツェが神聖ローマ帝国の支配下に入った16世紀に、2代目トスカーナ大公コジモ1世・デ・メディチ(1519～74年)がとった政策から生み出されました。コジモ1世は都市と一族の輝かしい伝統を生かし、軍事力ではなく文化で存在感を示そうとしました。

ウフィツィ宮の建造を筆頭に市内の美化につとめ、各国の宮廷にフィレンツェ芸術の名声を確立したのです。彼の右腕であったヴァザーリが、ウフィツィの設計者であり、同時にジョットなどフィレンツェに関わる美術家たちを称揚する『美術家列伝』の著者であることも偶然ではありません。

自画像コレクションは、17世紀にコジモ1世の曾孫レオポルド枢機卿(1617～75年)によって創始されました。彼は、自画像に作者のスタイル・美術観・世界観・立場などのすべてが表れると考え、その蒐集がいずれ、実物によるいわば美術家総目録になると自覚していました。レオポルドの甥コジモ3世(1642～1723年)は、自画像のサイズの統一などの効果的な展示にも尽力し、評判が広まると各国宮廷や画家たちも自発的に自画像を寄せるようになりました。

自画像コレクションによって、ウフィツィは全ヨーロッパの美術家の殿堂という地位を獲得したのです。

本展では、約1650点のコレクションから作品状態なども勘案し16～21世紀の60余点を展示します。バロックの巨匠ベルニーニやレンブラント、仏王妃アントワネットの肖像を描いたルブラン、パリから作品を持参したシャガール、未来派。西洋美術の教科書をめくるようなラインナップに加え、描法の比較、美術家の自意識の変遷など、いく通りもの見方ができます。日本でも国家戦略として文化育成が注目される昨今、大先輩の手腕をかいま見る好機でもあります。

以上